

第46期生 附属釧路中学校平和宣言

終戦から70年という節目の年を迎えた今年。私たちは戦争を昔のことだと思い、自分事として考えることができていませんでした。しかし、今も当時の辛い記憶や、後遺症に苦しめられている人が多くいることを知りました。そして被爆者の平均年齢は80歳と高齢化が進み、原子爆弾の悲劇を後世に伝えていくことが困難になっていることも分かりました。だからこそ、私たち若者が日本人として平和を発信していくことが重要なのではないのでしょうか。悲劇を昔話にしてはいけないのだと強く思います。

1945年8月9日午前11時2分、長崎県松山町の上空500mで原子爆弾が爆発しました。死者は73,884人、負傷者は74,909人、合計約148,000人と当時の長崎市の人口24万人の半分以上もの方々が被害に遭いました。特に被害が大きかったのが、放射線による被害です。放射線による初期障害をはじめ、後遺症に苦しんでいる人は、今でも多くいます。苦しみの原因となった核弾頭は、現在世界で約16,000発もあります。また、平和とは正反対の戦争や紛争が各地で起こっています。私たちが自分事として受け止めない限り平和の重要性を発信していくことはできません。

私たちが暮らす北海道から遠く離れた長崎に対して直接何かをするのは、難しい事かもしれません。しかし、私たちにも「繋ぐ」ことはできます。戦後、70年経った今、あの日の出来事を知っている人は少なくなりつつあります。これからの未来に、あの日の出来事を伝え繋いでいくこと、そして今を精いっぱい生きることが私たちの使命でもあり、今できることでもあります。私たちは現在平和に過ごしていることに幸せを感じ、感謝の気持ちを持って毎日を精いっぱい生きていきます。

今、私たちは戦争におびえることのない生活をしています。核兵器の脅威を実際に体験したことはありませんし、戦争が行われているのを直接見ることもありません。平和は嬉しい事です。しかし、「平和に慣れてはいけない」、私たちは長崎の人たちの痛みを学び、そう痛感しました。慣れてしまっっては、後世に伝えるどころか、その事自体をも忘れてしまうかもしれません。私たち北海道教育大学附属釧路中学校第46期生一同は、長崎で起こった過去を忘れず、将来悲惨な歴史が世界で繰り返されることのないよう、核兵器の脅威を後世に伝え、繋ぎ、日々の幸せに感謝して今を精一杯生きることをここに誓います。

平成27年12月2日

北海道教育大学附属釧路中学校46期生一同